

1. 「十三の砂山」考

合唱曲としてはなかなか難しいが、素敵な調べを醸し出す「十三の砂山」。歌っていて、歌詞の内容が良くわからないことに気づきました。

青森県民謡「十三の砂山」

十三湖（じゅうさんこ）辺に伝わる盆踊り唄で、市浦村十三（じゅうさん）の盆踊り唄とされている。「酒田高野の浜米ならよかる、西の弁財衆にただ積ましょ」と唄う「酒田節」が十三港に伝えられた。それに元禄時代の「投げ節」にみられる返しが付けられて盆踊り唄となった。元禄十三（1700）年、十三村は、津軽家五代・信寿の土佐守任官を機に「トサ」を「ジュウサン」と呼ぶようになる。鎌倉から室町時代には日本七港の一つとして、松前通いの船が寄港。上方文化を移入する玄関口として栄えた。興国元（1340）年8月、大津波が村を襲う。港は土砂で埋まり、村はさびれた。弁財衆は、取引に関するすべての権利を与えられた船頭の敬称で、中世の弁財使をもじって呼ばれた。昭和26（1951）年、文部省主催の全国郷土芸能大会に出場した成田雲竹は、相三味線の高橋竹山（1910～1998）の手をかり、今日の形に編曲して発表した。

以上のように説明されている。歌詞も私たちが習っている「おざきかわせば さきやいそぐ」のあとに「さあさ出た出た もろこし舟よ 波にゆられて そよそよ」というのもあれば「かわせば ナーヤーエー かわせば尾崎ナ 尾崎かわせば エー 先きやいそぐ 先きやいそぐ」というコーラス用のものまである。

- 1) 十三湖の辺り（七里長浜）は砂地が多くその砂山が米だったらなあ。西から来た財衆と呼ばれる船頭たちへその米を一杯積んで上げましょう。（その昔、遠くは関西から博多、福井の若狭などを經由して北前船が蝦夷地の松前に通っていた頃、本州の一番北に位置する十三港に寄港していた。秋田以北が出羽の地で、出羽の十三港と呼ばれていた。その港の位置が長いこと分からなかったが、最近、発掘調査の結果、見当がつけられたとのことです）
- 2) 「かんだのあらし」。陸奥湾に面したところに蟹田（かにた）と言う地名があり、その方面から吹く風が「かんだのあらし」となったそうです。この風は偏東風で、別名ヤマセと呼ばれ太平洋から中山山脈（ちゅうざんさんみゃく）の尾根を越えて日本海に吹き込む風のこと。この風は、冷害の元となった。
- 3) 十三港に何週間も滞在していたが、いよいよ風もいいので松前に向けて船出する。土地の人の厚い人情に触れてきて、別れがたく涙も

出たようです。「おざきかわせば」。十三港を出帆して北に向かえば小泊岬に突き当たります。土地の人は権現崎と呼んでいる其の岬には尾崎山があり、権現様を祭った神社もあり小泊岬南灯台があります。この岬を過ぎれば一安心。さあ、どんどん進もう。

- 4) お別れに貰った山で咲いているつつじや椿を船尾に飾っている。「とさぶのともでさく」。「とさぶ」は十三の船のこと。ご存知の「とも」は船尾のことで、艫とも書きStern。因みに船首は「へさき」Bow。洒落つ気のある船頭さんが、つつじやつばきを船尾に飾って、颯爽と北を目指して沖に漕ぎ出す心意気が伝わってきます。

以上、インターネットで調べた内容に市浦（しうら）村役場に取材したものを加えて纏めてみました。

H16. 3 (T2・本間)

2. クロコの企画

ご案内の通り、6月16日（水）のクロコディオロス・コンサートは日本丸合唱団も共催することになりました。これまでとは違って、交流会の開催など新たな方式を模索しています。準備企画にご協力いただける方、大募集中です。

3. 明治大学マンドリン倶楽部

岡本さん（B2, 休団中）のご尽力で、7月4日（日）県民ホールにて開催される上記のコンサートにゲスト出演することが正式決定しました。曲目等はおいおい決めてゆくことになろうと思います。まずは、手帳にご記入下さい。

4. 屋どきクラシックへのご案内

MMホール主催の上記コンサート、8月28日（土）開催分について、練習を開始しました。混声で日本の歌を中心に。詳細は小永井さんへ。

5. 新プラチナカルテット公開練習

プラチナ倶楽部への第2回慰問ミニコンサートに向け、練習を開始しました。前回練習は8日（月）、磯子公会堂リハーサル室にて開催。出演予定者に加え、宮崎さんにも参加いただきました。次回練習は4月22日（木）。お時間のある方は、ご参加下さい。問い合わせは、原田さんへ。

6. 住所変更

岩尾さん（B2）が引っ越されました。
〒242-0002
神奈川県大和市つきみ野7-4-12
電話：046-273-1455